

思いやりの灯火

——宮本常一「名倉談義」にみる伝承の資料化と生活変化の記述——

板橋 春夫

ITABASHI Haruo

放送大学客員教授・神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科非常勤講師

【要旨】 宮本常一『忘れられた日本人』収載の「名倉談義」は、愛知県北設楽郡名倉村の高齢者たちが生活変化の様相を語る会話形式の生活誌として執筆された。宮本は項目羅列的民俗誌からの脱却を目指した生活誌を構想していた。「名倉談義」はその実験的作品であった。宮本の質問に導かれて、参加者は子ども時代から壮年時代を思い出しながら語り合った。記述には語りのままを切り取った部分もあるが、宮本自身による資料化と会話の再構成が行われ、物語性豊かな生活誌として我々の前に存在している。

「名倉談義」では、金平さんは、重一家の前方が明るく鍬先が見えたので夜遅くまで働くことができたと言った場面がある。すると小笠原さんは、金平さんが働いているから重一家では灯りを点けておいたのだと解説した。その灯りは、村落社会における「思いやりの灯火」であった。読者に感動を与えるこの記述に対し、作意・誤謬^{ごびょう}が存在するという批判が出てきた。

そこで本研究では、批判部分の原因を探し出して現地調査で確認する作業を行った。その結果、「思いやりの灯火」に対応可能な位置などが確認できた。思いやりの灯火をめぐる聞き書きの資料化に関しては、宮本の瑕疵^{かし}を認めざるをえなかった。登場人物の修正などを行えば、思いやりの灯火は現実性があることを現地調査で確認できた。宮本は聞き書きを資料化する際に、間違えた可能性が高い。伝承の資料化に瑕疵があったのである。

本研究は、残された写真資料と宮本日記の確認、そして現地調査を併用することによって、宮本の調査時の復元を試みた。宮本が試みた生活変化の記述を読み解く作業を行った結果、宮本の生活誌の構想は一定の成果を収めていることが確認できた。座談会で話題になった茶桶や清め桶などの実物は現地に残っていないが、津具民俗資料館や奥三河郷土館に実物が収集保存されており、「名倉談義」の記述をより深く理解することが可能となった。

キーワード：名倉談義・思いやりの灯火・生活変化・生活誌・資料化

“Lights of Kindness”: Documentation of Folk Culture
and Changes in Way of Life in Miyamoto Tsuneichi's “Nagura Talk”

Abstract : Miyamoto Tsuneichi's “Nagura Talk” [in his book *The Forgotten Japanese*] is a chronicle of changes in way of life as told by the elderly in the village of Nagura, Aichi Prefecture. Mr. Kinpei said that because there was light in front of the Juichi house and he could see the tip of his hoe, he was able to work until late at night. Then Mrs. Ogasawara explained that because Mr. Kinpei was working, the Juichi family kept the lights on. These lights were “lights of kindness” in

the village community.

This account was later criticized for contrivance. This study aims at looking into the reason for such criticism, so the author also undertook fieldwork to verify the facts. As a result, locations were found that might have corresponded to the sites where the “lights of kindness” were observed. It is highly possible that Miyamoto might have been mistaken when recording what he heard from the informants. There were flaws in the process of documenting folk customs.

This study attempted to replicate Miyamoto’s folklore studies by verifying existing photographic evidence and Miyamoto’s diary, combined with actual fieldwork. As a result, questions about the dates of the meetings mentioned in the book and when the souvenir photos were taken were clarified. The *chaoke* (tea container), *kiyomeoke* (dipper for sprinkling water for cleaning), and other utensils discussed at the meetings have been preserved in the museum. This research resulted in a deeper understanding of the accounts in Miyamoto’s “Nagura Talk.”

KEYWORDS : “Nagura Talk”

“lights of kindness”

changes in way of life

life chronicles

documentation

はじめに

『忘れられた日本人』は、宮本常一（みやもと・つねいち／1907～1981）の代表作として親しまれている。⁽¹⁾宮本は、民俗語彙が項目羅列的に記述された民俗誌に疑問を持ちはじめ、暮らしの具体相をいきいきと記述する生活誌を重視すべきと考え始めていた。⁽²⁾その実践例が『忘れられた日本人』に収載された「名倉談義」であった。「名倉談義」は、昭和31年（1956）11月8日夜に開催された座談会記録が中心である。宮本は、愛知県北設楽郡名倉村（現、設楽町）の話者たちの語りを通して、明治時代から調査時までの生活変化を描き出そうと試みた。その方法は、村を外部から見て理解するのではなく、村や村人を内部から見てその特性を理解する内在的理解の模索でもあった（篠原2011：129-130）。

『忘れられた日本人』は、感動的記述として高い評価を得る一方、二〇〇〇年代に入ると、記述に^{ねつぞう}捏造・^{かいざん}改竄が見られるという厳しい批判も出された（井出2000；杉本2000）。その批判の矛先は「名倉談義」にも及んだ（杉本2009）。記述に作意や誤謬が存在するという批判が出てきたのである。本研究の契機はこの疑問解決にあったが、その作業の途次で宮本が試みようとした生活誌の記述の検討こそが重要課題であると理解するに至った。

そこで、本研究は三段階の作業と議論で構成することにした。第一段階は、生活事象の資料化に関する筆者の見解を提示することである。伝承資料と非文字資料の関係性について、立場を明確にした上で、「名倉談義」をめぐる先行研究の批評を通して、記述に関する問題点を確認していく。第二段階は、作意・誤謬があると批判された箇所に関する原因究明を進めることである。そのための現地調査を試みた。第三段階は、宮本が「名倉談義」で試みた、村人による内部からの生活変化の語りを記

述した生活誌について考察を行うことである。

I 非文字資料の資料化に関する諸問題

(1) 非文字資料の考え方

初めに、本研究における伝承資料と非文字資料の位置づけとその資料化をめぐる筆者の見解を提示しておきたい。非文字資料という用語は、神奈川大学が2003年度からスタートさせた21世紀COEプログラムで積極的に使い始めた新しい学術用語である。非文字資料の定義や概念に関しては、『非文字資料研究の理論的諸問題』（2008年3月発行）で本格的に論じられた。同書には、的場昭弘「人類文化研究のための非文字資料の理論的課題について」、河野通明「神奈川大学21世紀COEプログラムにおける『非文字資料の体系化』とは何か」、橘川俊忠「『非文字資料の体系化』についての理論的諸問題」の三本の論文が収載される。的場と河野の二人の論文は、「非文字資料」の体系化の難しさを浮き彫りにさせた。的場は理論面から、河野は実践面からそれぞれアプローチを試みた。橘川論文は、神奈川大学が採用した図像・身体技法・景観というカテゴリーに基づく考察であり、話し言葉に関しては言及していないので本考察から除外する。

本研究の研究対象である、座談会における話し言葉に限定して検討を加えてみたい。河野は、話し言葉を「未文字資料」と呼び、文字に極めて近い位置にあるとして「準文字資料」と捉えた（河野2008：58）。一方の的場は、非文字資料を定義するに際して「文字ではないが文字と同じことを行う伝達の媒体物」と解説した（的場2008：4）。つまり、文字は話されている言語を表記したものであるが、文字の出現によって過去の記憶を刻み、思考を発展させるという新しい世界を形成してきたと考えた。その意味では、話し言葉と文字資料とは、その時点で性格が異なる可能性があるという。話し言葉と文字資料の関係について論じる二人の見解は、この点で決定的に異なっている。筆者は、実際の作業を考慮すれば河野の見解が理解しやすい。しかし、話し言葉の文字資料化の問題を考察する立場からの的場の見解を深める意義を感じている。

なお、『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』（2008年3月発行）には、川田順造「非文字資料による人類文化研究のために—感性の諸領域と身体技法を中心に—」をはじめとする論文が収載されている。川田論文は文字社会の中にも非文字性というべきものは豊かに存在するとし、音声言語が持つ情報伝達性、行為遂行性、演技性の三機能のうち、文字が担えるのはわずかに情報伝達性だけであると論じた。話し言葉に即して考えると、まさにごく一部の機能である。川田論文は主として身体技法を論じたものである所以でこれ以上は触れない。

(2) 伝承資料の考え方

民俗学の主たる研究対象は、文字媒体として記録されることなく受け継がれてきた人びとの日常生活の事象である。非文字資料は、民俗学が扱ってきた伝承資料と近似関係にある。狭義の伝承資料はイイツタエ・カタリと呼ばれるもので、いわゆる口承文芸に属する。民俗研究者は、一定の問題意識のもとに日常生活の事象から研究資料として、口承文芸も含む広範な伝承資料（＝広義の伝承資料）を抽出してきた。以下、本研究で伝承資料と言った場合は、広義の伝承資料を指すことにしたい。

民俗学が研究対象とする資料は、伝承資料・文書記録資料・物質文化資料など多様な存在形態があり、それらの間に質的な優劣は存在しない。研究者が現地へ赴いて採集した伝承資料は貴重である。筆者は、日常生活の事象の解明にあたっては伝承資料だけに依存する必要はないと考えている。伝承資料は、図像・身体技法・景観・民具などの非文字資料と同列であると認識し、必要に応じて相互補完しながら考究していくことが、日本の民俗学にとって重要な道筋であろう。

その意味では、柳田國男が創始した民俗学は、伝承資料に偏していたと言えよう。地域で暮らす人びとの日常生活に関する事象の記憶は、定型化して語り継がれる狭義の伝承資料としてのイイツタエやカタリとはやや異なる領域のものであると思う。日常生活の事象は、必ずしも定型化されていないし、繰り返し性も希薄なことが多い。聞き書きという方法によって人びとの暮らしの記憶を資料化する。ここで言う聞き書きとは、日常生活の事象の記憶や伝承を記録化（＝文字資料化）するための実践である。過去の日常生活の事象は、人びとの記憶の中に存在しているため、その記録化にあたっては、必要に応じて技術的な操作を加えて固定化、すなわち文字資料化が行われていく。その際、調査者の恣意性や作意性は排除して正確性に徹しながら資料化されることが肝要である。繰り返しになるが、非文字資料から文字化への変換（＝文字資料化）は慎重に行うべきであり、作意や恣意性などは排除すべきであることは言うまでもない。本研究は、以上のような前提で考察を進めていきたいと思う。

ここで、民俗学が重要と考えている「伝承」という用語について検討しておきたい。この用語は、柳田國男が自身の民俗学理論書で用いるようになったものである。柳田の著作における伝承の初出は、昭和3年（1928）の『旅と伝説』第一年八号から五回連載された「木思石語」⁽⁴⁾であろう。その論文は、後に『木思石語』として一冊にまとめられた。伝説に関する書であるが、柳田は其中で伝承のあり方を紹介しながら三部分類を提示してみせた（柳田 1998：218-220）。すなわち、伝承のあり方として口碑・体碑・心碑の三種に分けた。口碑以外は十分な説明をしていない。それは伝説の論文であるからやむを得ないかもしれない。これが『郷土生活の研究法』と『民間伝承論』で発表された三部分類の原型である。『木思石語』には、以下のような興味深い指摘が見られる。

我々が通例「伝承」と訳して居るトラヂションは、事によると永年の法律制度のやうな、或少数の権力者の考へで定めたものまで、一しよくたにされる懸念がある故に、特に民間の「伝承」と断らねばならぬ必要を認める。それでも尚「しきたり」と「言ひきたり」とを区別しようとする
と、御丁寧に「民間の口頭伝承」といふなければ通じないことになつて居る。（柳田 1998a：219）

この文章は口碑に関する説明であるが、柳田にとって「トラヂション」は tradition の邦訳という認識であり、伝承と伝統をほぼ同じ意味で使っていた。しかも、「民間の口頭伝承」という表記で解説している。『木思石語』で問題提起された伝承に関しては、昭和9年（1934）の『民間伝承論』にも同様な記述がある。当時の柳田にとって、伝承は伝統と置き換え可能な概念であったようであり、伝承を新しい用語として用いたいという意欲もうかがえる（柳田 1998b：17）。

そして柳田は、『民間伝承論』の中で、三部分類を本格的に提示した。その説明によると、第一部

は目に映ずる資料（＝旅人の学＝体碑＝生活諸相）、第二部は耳に聞こえる言語資料（＝寄寓者の学＝口碑＝言語芸術・口承文芸）、そして第三部は最も微妙な感覚に訴えて初めて理解できるもの（＝同郷人の学＝心碑＝生活解説・生活観念）と分類し、解説を加えた。柳田が創始した民俗学は、第三部に力点が置かれる傾向が認められるが、三部分類の全体から日常生活の事象に迫ることが重要であることを改めて認識させられる。

（3） 伝承資料の資料化

文字資料は、歴史資料としてある程度限定的に保存されてきた。一方、伝承資料を含む非文字資料は、伝承や身体技法によって行われる人間の営みに関する資料であるから、どうしても多様で膨大な量になってしまう。香り、匂い、音などのように、文字に記録されることが少なく、人びとが同じ認識で伝承するのは難しい。多くの人に共通体験が残っていればそれは共有の伝承となっていく。景観・風景などは美しい感動したという感想にとどまり、知識の共有化は難しいように思う。つまり文字化すなわち資料化に難点がある。

人間の営みに関する資料は、従来文字化されることは少なかったが、民俗学はそれを可能にする学問として創始されたのであった。そして、民俗調査の多くは、現地の人の語りに耳を傾け、生活事象のありようをていねいに観察して資料化していった。古い記憶を聞き取り、語られる言葉を録音したり、要点をメモしたり、記録法はさまざまである。また、現地に赴いて祭りを見学したり年中行事を観察したり、あるいは体験しながら観察調査を行ってきた。聞き書きの場合は、特に話者と一定の信頼関係を保ちながら行う作業であり、調査者は全神経を駆使して対応することになる。

座談会などでは、参加者を良く知る人物がその場をコーディネートしてくれると、初対面であってもリラックスして語れる環境を創り出せる可能性が高い。本研究が対象とした「名倉談義」は、そのような条件をクリアした理想的な座談会であったと推測される。宮本常一は、現地の人が語る言葉を耳で聞いて、それをカタカナを使って速記のように文字化していった。語りをそのまま文字化するのが理想かもしれないが、語ったままでは文法的におかしかったり余計な修飾語が多用されたり理解しづらいことが多い。

宮本は、聞き書きした内容と聞き書きしたときの臨場感を思い出しながら、話者の語りを再生する作業を行ったのである。それがいわゆる文字資料化である。聞き書きのメモは、確認をしながら正確に文字資料への変換がはかられるべきである。そして、資料化にあたっては、人間の行う作業であるから聞き書きにおける勘違いや聞き間違い、あるいは記録化に際しての記録ミスなどいくつかの瑕疵^{かし}が想定される。それらを踏まえた上で、聞き書きの正確性が担保されることの意義は大きい。本研究は、以上の観点から「名倉談義」にみる伝承資料の資料化に関する考察を展開していく。

Ⅱ 先行研究の批評

本研究は、岩波文庫版『忘れられた日本人』をテキストとする。それは誰でも入手可能で、記述の確認に関する議論に参加しやすいからである。同書の初版は、未来社から昭和35年（1960）7月に刊行された。収録論考は、雑誌『民話』に「年寄たち」と題して連載されたものが中心であるが、

「名倉談義」は書き下ろしの論考である（宮本 1984：304-305）。「名倉談義」は、調査地概要、話者の語り、一人の話者の語り、という構成である。

次に、「名倉談義」に関する主要な先行研究である六名の著書や論文を取り上げる。⁽⁵⁾以下、内容を紹介しながら批評を試みる。

①佐野眞一『宮本常一が見た日本』（2001 年）

佐野眞一は、宮本が名倉を訪ねた道程をたどって万歳峠を歩いている。佐野の訪問時に当時の座談会参加者は全員が鬼籍にあった。息子世代も多くが聞き書き困難であった。「名倉談義」で精彩を放つのは小笠原シウであるが、佐野の取材時にはシウの息子の嫁が健在で、座談会について「姑が沢田久夫さんに引っぱられて大蔵寺に行った日のことはよくおぼえています。秋口の頃で、昼出かけていて夜遅く帰ってきました」と語ったという（佐野 2001：104）。しかし、その語りは後述するように記憶違いであった。佐野は、稲刈り後に調査日程を設定するなど宮本の細やかさに感心している。座談会から五〇年経って訪れた名倉の風景は宮本の写真と変わっていないことに驚き、変わらないことへの関心が宮本民俗学のダイナミズムであると述べている（佐野 2001：108）。

②木村哲也『〈忘れられた日本人〉の舞台を旅する―宮本常一の軌跡―』（2006 年）

木村哲也の『〈忘れられた日本人〉の舞台を旅する―宮本常一の軌跡―』は、宮本に魅了されて作品の舞台を訪ねた記録である。「名倉談義」は、同書の第九章「現代版〈名倉談義〉―愛知県北設楽郡設楽町名倉の旅―」で取り上げられる。木村は、大蔵寺（臨済宗）の山門前で老僧に出会う。僧侶の中村修は、座談会にオブザーバーで同席していた。中村は、宮本が何でも書き留めていたのを記憶し、万歳峠の話は大変興味を持って何度も聞いていたと語った（木村 2006：197）。

木村は、猪之沢集落の澤田淳夫・豊美夫妻の協力を得て、平成 8 年（1996）2 月 2 日に「現代版名倉談義」を開催した。それは奇しくも「名倉談義」から四〇年後であった。「名倉談義」参加者の子や孫が澤田家で座談会を開催した。昭和 39 年（1964）の圃場整備とそれに伴う機械化の話題から始まり、圃場整備以前は、猪之沢の水田はへそまで入る湿田で蓮根が作れるほどであり、稲刈りには舟を使っていた。除草剤の使用によってツバメや昆虫が減るなどの環境変化も語られる。映画館やパチンコ屋など、名倉談義時代には存在しなかった施設などが話題となっており、生活変化のスピードを感じる。宮本は、名倉の井戸が自宅から遠いことに驚いたというが、水道が引かれて水洗普及率が高い現実が語られた。高度経済成長期を挟む四〇年間の生活変化の進展を感じる座談会である。

③斎藤卓志『世間師・宮本常一の仕事』（2008 年）

斎藤卓志は、『世間師・宮本常一の仕事』の序章「奥三河の灯 ― 愛知県北設楽郡名倉村 ―」で「名倉談義」を取り上げ、澤田久夫を詳しく紹介した。澤田は名倉青年団長時代に、ガリ版刷りの団報が日本青年館の「一人一事研究展覧会」で認められ、昭和 8 年（1933）に神宮外苑の日本青年館に就職した。上京後半年ほどで肺結核に罹り、長期療養を余儀なくされた。それが澤田を学問へと向かわせることになったという。澤田は『三州名倉』（1951 年）を単独で執筆した篤学の人で、本の重みで八畳間の床が抜けるエピソードが伝わる読書家であった。

座談会のひとこまとして、夜遅くまで灯火を点けていた家の話が語られる。斎藤は、三河の山中にぽっかり浮き出たような名倉村のたたずまいが描き出されていると評価する。調査のあり方などを論じた後、「ところで案内役の沢田久夫は大蔵寺にいたのだろうか。文中には顔を出していない」と書く（斎藤 2008：17）。斎藤の心配は杞憂で、澤田は座談会で二回発言している（宮本 1984：78・84）。澤田の二回目の発言で、養蚕を説明した中で「群馬の共進社」とあるが、「埼玉県の競進社」の間違いであろう。

④杉本仁「作意された民俗——宮本常一「名倉談義」を読む——」（2009 年）

杉本仁は、論文「作意された民俗——宮本常一「名倉談義」を読む——」で、「名倉談義」に疑義を呈した⁽⁶⁾。杉本が論題に使う「作意」とは、「作者が芸術作品を創作する意図。創作上の意向・趣向」（小学館『日本国語大辞典』）の意味であることを確認しておく。杉本は、網野が岩波文庫版『忘れられた日本人』の解説で同書は文学作品として読むことができると論じた点を捉え、民俗学は事実をもとに法則性を求める社会科学であり、民俗学と文学が相互乗り入れ可能な書ではないと網野を批判した（杉本 2009：191）。杉本は、宮本民俗学の生成過程に着目して「名倉談義」を把握しようとした。杉本が問題にしたのは、金田金平の水田が重一家のすぐ下にあり、金平が夜遅く水田で働いているときに、重一家で灯火を点けておいて手元が見えるようにしたという箇所である。杉本も述べるように、相互に思いやる村人同士の感動的な光景である。村は思いやりだけでなく、目に見えないおとしあいもある、と宮本是指摘する。杉本は、その記述に対して、宮本の常套句のように思われてならないとし、杉本は宮本の記述には「誤謬」「カラクリ」が存在すると疑問視した。杉本の調査では、該当する人物（重一）が存在しなかったという。検討に値する重要な指摘である。

⑤印南敏秀「宮本常一と愛知」（2013 年）

印南敏秀は、論文「宮本常一と愛知」の中で、宮本には名倉の調査ノートが5冊、写真は117コマあると紹介した。『宮本常一写真・日記集成』上巻を利用し、名倉調査一覧を作成した。予備調査は、昭和31年（1956）10月6日から8日までの2泊3日である。第一回調査は、昭和31年（1956）11月5日から13日までの8泊9日である。8日の夜、大蔵寺で地元の話者四人と座談会を開催した。第二回調査は、昭和32年（1957）5月13日から21日までの8泊9日であった。印南は「沢田氏は、座談会は人選で成果が左右されることを知っていて、十分に配慮したはずである」とし、地元の郷土史家澤田久夫の存在に注目する（印南 2013：78）。

名倉には桜屋旅館があり、宮本はそこに宿泊した。その旅館にはコロンビア大学から来ていた社会学者ジョンソン夫妻が滞在していた。調査地選定は、澤田の『三州名倉』の影響が大きかったという。印南は「名倉談義」に対する評価について、文学的であるとか、学術的に疑問視する論文の存在に対し、「いろいろ議論はあってよいが、著者がどこまでフィールドワークをおこない、宮本資料を使ったのかに私は疑問をいだいている」と記した（印南 2013：87-88）。印南は、「名倉談義」について「文学的要素を加味しながらだれもが実感できる生活誌として完成させたと思っている」と評価した（印南 2013：88）。生活誌という視点からの評価である。

⑥岩田重則『日本人のわすれもの―宮本常一『忘れられた日本人』を読み直す―』（2014年）

岩田重則は、『日本人のわすれもの―宮本常一『忘れられた日本人』を読み直す―』の中で、分析対象とする『忘れられた日本人』は、事実をもとに書いたハナシ集であると論じた。ハナシ集とは聞き慣れない言葉である。岩田によると、「事実取材しながらも、事実をできるだけ事実のままに再現しようとするノンフィクションとしてではなく、宮本がその感性のままに再構成したハナシ」とあるという（岩田 2014：8）。そして岩田は『忘れられた日本人』を、学術資料として読むべきではないと論じた（岩田 2014：8）。

同書の第二章「事実とフィクションのあいだ」の一節「ムラの共同認識」の中で「名倉談義」を取り上げ、複数の出席者が地域社会で無意識に共有された生活感覚を浮き彫りにさせた稀有な作品と高い評価を与えた。宮本が座談の進行と調整を進めながら、原稿をまとめる際にも再構成があったはずであるという。「内なる生活感覚」という視点は重要であろう。この点は、篠原の見解に近いものである（篠原 2011：128-130）。岩田は、『忘れられた日本人』からは、座談会の日時を特定できないという。注記で『宮本常一写真日記集成』を利用しているが、岩田が引用した同書の昭和 31 年（1956）11 月 8 日夜の記事によって開催期日が判明することを付記しておきたい。

Ⅲ 問題設定と解明すべき課題

ここまで先行研究の批評をしてきたが、本研究で解明すべき課題として、以下の三点が設定できる。

第一の課題は、『忘れられた日本人』の位置づけの問題である。読み手の立場から、①民俗学の書、②民俗学と文学の相互乗り入れ可能な書、③物語・ハナシ集、④文学作品、という四つのアプローチがあるが、いずれの立場からアプローチすべきかという問題である。宮本常一は民俗学者であるから、当然に「①民俗学の書」とする立場がある。網野善彦のように「②民俗学と文学の相互乗り入れ可能な書」と理解する人もいる。また、岩田重則のように「③物語・ハナシ集」と認識した上で論じる立場も存在する。一般の読者は「④文学作品」として読む人が多いと思われる。作品の読み方は千差万別であってよいし、こだわる必要はないという意見もある。

現代人にとって、高度経済成長期以前の山村生活における生活感覚を理解するのは至難の業である。当然のことながら同書の内容が実際にあった話と認識できない点が多いに違いない。杉本は、民俗学の書として読む立場であり、筆者も同じ立場にある。この立場の研究者が大切にすべき立脚点は、記述内容を追認できることであろう。もちろん聞き書きの場合には、同じ条件下の再調査は困難を伴う。年代が遡る聞き書き資料であれば、該当人物は存在しないし、たとえ存命であったとしても人間の記憶は曖昧になることが多い。それでも、調査の原点に迫る努力を惜しんではいけないと考える。

第二の課題は、記述に作意・誤謬が存在するという問題である。杉本が論じたように、宮本常一に果たして作意があったかどうかという点である。問題になっているのは、「名倉談義」の最も感動的な箇所である。宮本は、座談会を紹介する前に以下のように記した（傍線筆者）。

そのとき、きいていて大へん感動したのは、金田金平さんが夜おそくまで田で仕事をする。とくに重一さんの家のまへの田では夜八時九時まで仕事をした。重一さんの家はいつもおそくまで表

の間に火がついていたので、そのあかりで仕事ができたら、小笠原シウさんが、それはいつもおそくまで火をつけていたのではなくて、今日は金平さんが仕事をしているから、また夜おそくなろうと、わざわざ明るくしてやっていたとはなし、しかも、この座談会でそれが語られるまで、一方はその好意を相手につたえておらず、相手の方は夜のおそいうちだと思ひこんでいたという事実である。(宮本 1984：62)

宮本は、この思いやる灯火のくだりを村の生活における美談として取り上げようとした。それに対して、杉本は以下のように批評したのである（傍線筆者）。

このシチュエーションに間違いないのであろうか。どうも、登場人物に「誤謬」があるようなのである。「カラクリ」といってもいい。該当する人物（重一）の存在を調べてみると、この人物が存在しないのである。登場人物を女性に転換すれば、特定できる人物がいないわけではない。私の聞き調査に間違いがないとすれば、宮本は女性を男性に転換したということになる。当然、なぜ、という疑惑は生じる。(杉本 2009：203)

杉本は、宮本のこの記述部分に関して、作り話の可能性があると指摘した。この課題の解決については、登場人物の確認作業が必要になる。次に、灯火を点けて明るく照らしてやったという重一家と金平の水田の位置関係の確認が待っている。杉本の指摘は厳しいが、宮本が記述した「重一さんの家」の存在が判明すれば、おおむね解消できる問題である。しかし、筆者の調査でもその解明は信じられないほどの困難が伴うことになった。

そして第三の課題は、宮本が目標とした生活を向上させる^{てこ}梃子になった技術が、構造的に捉えられたかという点である。宮本の考えていた生活誌というものを再考してみる必要がある。「名倉談義」の記述は、地元の高齢者が大蔵寺に集まって生活変化の様相を語りあう手法をとった、まさに生活誌の実践である。どのように聞き書きが行われ、当該地域の生活変化を捉えられたかを解明・検証することが課題となる。

IV 宮本常一の名倉調査

(1) 名倉村調査と調査地概要

宮本がなぜ名倉で民俗調査を実施したのか、その経緯をみておきたい。名古屋大学の村松常雄らは、昭和 26 年（1951）の科学研究費助成を受けて名古屋近辺の農山漁村を一〇人ほどのメンバーで調査していた。途中、海外からの高額な助成金を得て「文化像とパーソナリティとの関係」というテーマに変更した大規模調査に発展させた。その時点で、宮本が名倉調査に入るようになっていく。

宮本は、自身の計画ではなく、あくまでも文化人類学・民俗学班の特別協力者として、メンバー拡大後の昭和 31 年（1956）7 月から参加したのであり、他動的な参加と言える。調査は、大都市・中都市・農村・山村・漁村から調査地が選択され、山村として名倉の猪之沢・大久保・社協の三集落が選ばれた。総合研究の成果は『日本人—文化とパーソナリティの実証的研究—』としてまとめ、宮

本は社会学の中田実と「名倉村3部落について」を共同執筆した（村松編 1962：321-340）。

佐野眞一によると、宮本が名古屋大学の調査団に加わる経緯は、九学会連合の能登調査に遡るといえる。昭和27年（1952）の能登調査で、宮本は社会学班の一員として参加した。社会学班幹事の武田良三（早稲田大学教授）が宮本のフィールドワークを評価し、愛知大学教授の川越淳二に相談する。川越は、名古屋大学の調査以前から名倉で基礎調査を進めていた（佐野 2001：95）。名倉の選定は、昭和26年（1951）に『三州名倉一史的変遷篇一』を執筆した地元在住の郷土史家澤田久夫の存在が大きい。（澤田 1951）。宮本たちが調査に入った時点、名倉村は直近の昭和31年（1956）9月30日に田口町、段嶺村、振草村の一部と合併して設楽町となっていた。宮本の調査時は、国鉄飯田線の本長篠駅から三河田口駅までの豊橋鉄道田口線が走っていた。これは木材運搬を主目的とした鉄道であった。昭和43年（1968）に廃線となり、現在の公共交通は路線バスである。

宮本常一・中田実「名倉村3部落について」によると、宮本らの調査は、旧名倉村全二〇集落のうち猪之沢・大久保・社協の三集落を対象にしている。明治7年（1874）は、猪之沢一〇軒・大久保一軒・社協一軒で計三二軒であった。宮本らの調査時は、猪之沢一三軒・大久保一六軒・社協一三軒の計四二軒で、かなり増加している。三集落は、標高六六〇メートルの高地に位置する山間高冷地で山々に囲まれているが、林業よりも農耕に比重を置く立地条件にある（宮本・中田 1962：321-327）。

（2）座談会の開催期日と参加者

「宮本日記」は、昭和31年（1956）11月8日の項に「晴。朝、沢田さんの家へ行って今夜の大蔵寺のあつまりには古屋野氏の出席できないことをはなす。（中略）夜大蔵寺で老人たちと座談会。はなしなかなかはずみ、つくるところを知らず」と記している（宮本 2005：59）。

11月8日の夜に、大久保集落の大蔵寺（臨済宗）で座談会が開催されたのである。「名倉談義」の記述は、語る人の表情・物腰・考え方を浮き彫りにしている。現在では、個人名表記は個人情報保護の観点から難しいが、昭和三十年代には個人名を出すことによって語りの効果と聞き書きの信憑性が高まるという傾向があった。話者の語りをきちんとまとめたという意図もあったと思われる。

「名倉談義」で発言しているのは、座談会に参加した四名と澤田久夫の計五名（①～⑤）であった。なお、座談会の席には、大蔵寺住職の中村修（⑦）が同席していた。宮本の共同調査者であった川村久二雄（⑧）も同席していた可能性が高い。座談会後に宮本が聞き書きした松澤喜一（⑥）を加えた参加者のプロフィールは、以下のとおりである。皆半径一キロ圏内に居住していた（図1「名倉談義」関係地図）。（写真1 大蔵寺の玄関）

①金田茂三郎（かなだ・もさぶろう） 明治14年（1881）～昭和44年（1969）

座談会時点＝七十五歳。猪之沢集落に住み、参加者の中で一番の年長である。「わしはまたあんたらより四つも上」と語る。松澤喜一家では旅の法印夫婦を寄宿させたが、その法印が茂三郎を見て、「おまえは易者になる資格がある」と占った。そのときは宮大工の弟子で修行中であったが、のちに御嶽行者として易を占い、「茂三ガミサマ」と通称された。法印の占い通りになった。

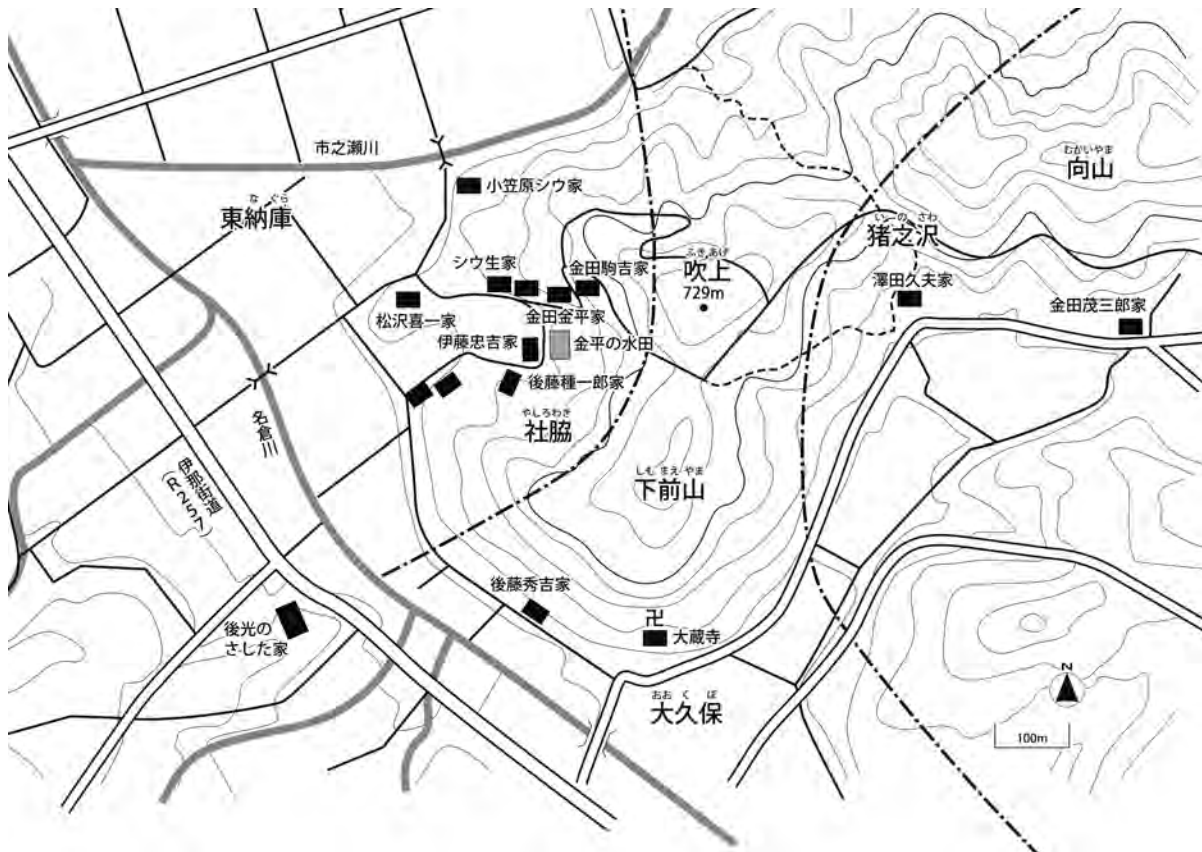


図1 「名倉談義」関係地図



写真1 大蔵寺の玄関（宮本調査時とほぼ同じ、下駄箱が追加されている）

②後藤秀吉（ごとう・ひできち） 明治18年（1885）～昭和60年（1985）

座談会時点＝七十一歳。大久保集落に住む。座談会では、荷車をはじめ交通の発達について語る。あわせて経済関連の話題も出し、明治の道路改修のことを語る。秀吉夫婦は長生きであったが、とくに秀吉は百歳まで生きた長寿であった（写真2 後藤秀吉の百歳手形）。田打ちのユイの話から、金平の働き者の話へ話題を移した。



写真2 後藤秀吉の百歳手形（右下、奥三河郷土館展示）

③金田金平（かなだ・きんぺい） 明治18年（1885）～昭和37年（1962）

座談会時点＝七十一歳。社協集落に住み、一町五反の田畑を持つ精農である。当時、働き者と評判の人であった。金平は後光がさした家の前隣に生まれたが、次男であったので金田家に婿養子に入った。現在、子孫は他地区へ移り住む。

④小笠原シウ（おがさわら・しゅう） 明治16年（1883）～昭和32年（1957）

座談会時点＝七十三歳。社協集落に住む。明治16年（1883）に加藤家で生まれ、すぐ近所の小笠原家に嫁いだ。座談会の翌年に亡くなった⁽⁷⁾。小笠原シウは貧しい家の娘で六歳で子守奉公に出されたという。松澤喜一家のすぐ上の加藤家で生まれたので、嫁に行ったとは言え、地元に通じていた。

⑤澤田久夫（さわだ・ひさお） 明治38年（1905）～昭和60年（1985）

座談会時点＝五十一歳。猪之沢集落に住む。宮本は、澤田を「大へんな郷土史の百姓学者」と評した。名倉調査のキーパーソンである。座談会における澤田の発言は二箇所ある。一か所目では廃仏毀釈を語っている。名倉では五〇人ほどが神葬祭になったので、そのこともあって寺の坊さんが墮落したことを語る。二か所目では養蚕の解説をしている。

⑥松澤喜一（まつざわ・きいち） 明治28年（1895）～昭和33年（1958）

調査時点＝六十一歳。社協集落に住む。松澤喜一は、都合で座談会不参加であったが、後日、宮本に対して座談会の補足的内容を語る。この聞き書きは、松澤家の縁先に腰かけ、朝から晩まで聞いたときの冒頭部分であるという（宮本1984：86）。松澤喜一家は古い家であるが、百年近く分家を出していない。現当主は、喜一の孫敏勝氏（1938年生まれ）である。

⑦中村修（なかむら・しゅう／法名宗修） 大正元年（1912）～平成8年（1996）

座談会時点＝四十四歳。大久保集落の大蔵寺住職で、会場の提供者である。座談会では発言の記載はない。座談会当時は四十四歳と若かったので、聞き役に回ったと推測される。

⑧川村久二雄（かわむら・くにお）

「名倉談義」に、川村の記述は見当たらない。「宮本日記」によれば、昭和31年（1956）11月調査

の同行者である（宮本 2005：59）。川村は宮本と共著で『林業金融基礎調査報告書 25 造林篇三号愛知県北設楽郡設楽町名倉』を執筆している。⁽⁸⁾川村が同席した可能性が高いので、ここに記載しておく。

以上が座談会の参加者である。宮本は「四人のいずれも七十歳以上の老人を大久保の寺へよびあつめて下さって話に花をさかせたのである」と記している（宮本 1984：43）。

（3）民俗調査と座談会

昭和 31 年（1956）11 月 8 日の夜、大蔵寺ではどのように調査が始まったのだろうか。初めに宮本が「この村はどのように変わりはじめたんでしょうかな」と質問して始まったであろう。それを受け、金田金平が村の生活変化の兆しを語りはじめ、金田茂三郎が具体的なことを思い出して付け加える。後藤秀吉も子ども時代を思い出す。道路が開通して村が発展する様子が語られる。道路に関わる工事関係者の話題が出て、女性が絡んで座談は面白く展開していく。

もちろん、この記述の通りに語られたというのではなく、ある程度の入れ替えや省略は施されているであろう。しかし、民俗研究者が研究の基本である語りの内容を改竄することがあるだろうか。下調べを十分に行った上で、話者が自由に語りあってもらえる座談会を実施したことがうかがえる。宮本は、「名倉談義」の前章「村の寄りあい」の中で、座談会について以下のように解説している（傍線筆者）。

老人たちがみんなでまず面白そうに話し出したのが万歳峠のことである。はじめは何のことかよくわからなかったのだがききただしてみると、村から山をこえて田口の方へ出ていく峠のことである。日清戦争の時まではその峠の頂上まで出征兵を見送って万歳をとなえて別れて来たのであるが、峠の上で手をふって別れると、送られた方はすぐ谷のしげみの中に姿がかくれてしまう。そこで別れ場所を峠の頂上より五丁あまり手まえの所にした。そこで、別れの挨拶をして万歳をとなえ、送られる方はそれから振りかえりながら、五丁あまりを歩いて峠の向うへ下っていくのである。（宮本 1984：51）

村人たちが、出征兵士を送る際に万歳をする場所を変更した話である。宮本は村人たちの細かな演出に感動している。筆者は、集団面接調査のときに、集まった話者たちが一斉に語り始めることを何度も体験している。座談会形式で話を聞き取る際、下手に合いの手を入れないほうが良いことはたびたび経験する。それに関して、宮本は『忘れられた日本人』の「あとがき」で下記のように記している。

古文書の疑問、役場資料の中の疑問などを心の中において、次には村の古老にあう。はじめはそういう疑問をなげかけるが、あとはできるだけ自由にはなしてもらう。そこでは相手が何を問題にしているかがよくわかって来る。と同時に実にいろいろな事をおしえられる。「名倉談義」はそうした機会での聞取である。（宮本 1984：308-309）

座談会参加者は、道路の話から万歳峠を思い出す。日清戦争のときに出征する村人を送るための万歳峠の見送りである。村人は出征兵士に向かって万歳をするが、その方法に演出効果が付加される。参加者は懐かしく語り始める。調査の始まり部分で、参加者が一つの話で盛り上がると、調査者は目立たない脇役に徹しながら仲間に溶け込んでいくことができる。

山から荷を積んだ馬が降りてくるときに鈴の音が聞こえてくる。そのシャランコシャランコの音色によって、誰の所有する駄賃馬であるかがわかったという。これは音の民俗そのものであり、音がさまざまな記憶を人びとに思い起こさせる、まさに感性の連鎖である。宮本は、その話の途中で、しっかりと短めの質問をした（はずである）。そのために「はい、馬子歌はうたいましたで……」という文言が入る。宮本は、「あなたはその歌を歌えますか」と聞いた（に違いない）。なぜならば、「わたしにゃ歌えませんが……」とあるからである。

また、別の箇所では「しうとめの嫁いじりでありますか？」とある（宮本 1984：80）。この言葉は、明らかに宮本の質問に対するものであろう。

小笠原シウは、嫁と姑の関係を語り、現在も自分は昔どおりにするけれども、それを嫁には強制しないと語っている。このように、「名倉談義」には、宮本が座談の中に溶け込んだ存在として見えてくる。宮本が四人の語りに耳を傾けながら、合いの手を入れたり、質問を投げかけたりしている。これは宮本が質問したことを示すものであろうが、記述の方法の一つであった可能性もある。なお、コーディネーター役の澤田は、座談の内容の解説にあたって二回ほど発言をしている。

「名倉談義」の座談会は、用意周到な座談会であった。宮本は、民俗調査においてどのような点を心がけていたのだろうか。宮本は澁澤敬三の指導を受けた中に、①他人に迷惑をかけないこと、②出しゃばらないこと、③他人の喜びを心から喜びあえること、という三か条がある、と記している（宮本 2008：14）。これを調査の現場に置き換えると、調査に出かけて村人に迷惑をかけることが大事である。たとえば調査期日について、農作業の繁忙期に出かけると迷惑をかけるし、作業を中断させるようなことも失礼であろう。調査者の都合で行動すべきではない。あくまでも調査をさせていただくという気持ちが必要である。ましてや警察官のような訊問調査をしてはいけない。そのために出しゃばらずに、「その場で、自分を必要としなくなったときは、そこにいることを周囲の人に意識させないほどにしているということである」という態度が必要であると述べる（宮本 2008：14）。これは何でもないように思われるが、実は結構難しいものである。宮本の民俗調査は、澁澤から受けた指導がしっかり守られていたと推測される。

V 宮本常一撮影写真の謎

(1) 座談会の記念写真という錯誤

座談会の記念写真とされる一枚の写真（写真3 座談会時撮影と誤認されてきた写真）に疑問が出てきた。第一点は、座談会時の撮影であると長く誤認されてきた写真（写真3）は、明らかに昼間の写真である。佐野眞一の記述では、参加者の一人は昼から出かけたとあり、これであれば昼の写真で問題はないが、既にみてきたように開催は夜であった。おそらく夜には写真が撮れないだろう。第二点は、須藤功の著書に使われた写真は、宮本がスーツでネクタイを締めている（須藤編 2004：94）。



写真3 座談会時撮影と誤認されてきた写真（周防大島文化交流センター所蔵写真 資料番号 TMP 0199-11f）

この矛盾を解明する必要がある。名倉の澤田家が所蔵する宮本常一からの葉書には以下のように記される。葉書の消印は、1961年1月30日である。

（表面）

（宛先） 愛知県北設楽郡設楽町名倉

沢田久夫様

（差出人） 東京都芝区三田綱町十番地、日本常民文化研究所、宮本常一

（消印） 「36、1-30」（1961年1月30日）

（裏面）

拝啓

其後御健勝にて何よりに存じます。

今度は参上いたしましていろいろお世話になり、まことにありがとうございました。二十六日にくりあげになり、黒野さんは徹夜で編集したとの事ですが割合よくまとまり二、三の人から感想もききましたが、よかったという評判なので喜んでいきます。ただ座談会のほとんどを時間の都合でできてしまわなければならなかったのはおいしいことでした。きってしまうとそれまでになってしまうので、座談会るとき筆記でもしておけばよかったと思った次第です。黒野さんもこうした形で村の人に接したのははじめてで、とても喜んでいました。

とりあえずお礼まで申し上げます。

一月二十九日

「名倉談義」の座談会は、昭和31年（1956）11月8日夜の開催は判明している。この葉書は五年後のものである。内容をみると、座談会のほとんどが編集の都合で切られた、筆記しておけばよかったとある。この葉書は何のお礼なのだろうか。それを解決してくれたのは、澤田家所蔵の写真アルバ

ムで、澤田久夫のメモが以下のようにあった。

NHK「民俗学の旅」録音 於大蔵寺
後左より、久世、秀吉、宗修和尚
前 久夫、金平、茂三郎、後藤さわ

このメモによって、NHK の番組「民俗学の旅」取材時の写真であることが判明した。このときに撮影された写真が、佐野眞一、斎藤卓志らによって、「名倉談義」座談会時の写真と誤認されている。木村は、『忘れられた日本人』刊行の直後なので、その刊行記念の番組制作と推測した（木村 2006：204）。実際には「民俗学の旅」の収録であった。小笠原シウは座談会の翌年に死去している。写真には「後藤さわ」の名がある。

葉書の消印は、1961 年 1 月 30 日であり、澤田久夫宛の宮本の葉書は、NHK 取材用の座談会に対するお礼であった。木村は著書で『『忘れられた日本人』刊行後、NHK 番組収録のため「名倉談義」が再び開かれた日。大蔵寺の庫裏の前で記念撮影。1951 年 1 月 20 日、宮本常一撮影』と記している⁽⁹⁾（木村 2006：199）。この指摘に誰も気づかなかった。間違いの連鎖が続く中、須藤功は『写真でつづる宮本常一』で、宮本常一が中央に収まる記念写真を用いた。そこには以下のように解説された（傍線筆者）。

宮本常一は名古屋大学精神医学教室の村松教授を中心とする、人間関係総合研究班の調査に参加し、愛知県北設楽郡名倉村（現設楽町）を訪れた。昭和 31 年（1956）11 月 5 日～11 日を最初に都合三度、それによって村の様子をかなり詳しく知ることができた。写真は最初に訪れたとき行った座談会「名倉談義」の参加者と同席者。左より前列、澤田久夫、金田金平（社協）、宮本常一、金田茂三郎（猪ノ沢）、後藤さわ（社協）。後列、鈴木久世、後藤秀吉（大久保）、中村宗修。カッコ内に地名を記した人が座談会の参加者。座談を行った大蔵寺（住職・中村宗修）本堂の玄関前で写す。（須藤 2004：94）

この写真は、撮影日が記されていないが、明らかに NHK の記念写真である。解説文にある「鈴木久世」は、宮本が宿泊した桜屋旅館の主人である。須藤の写真解説は名倉の人たちの確認を得ているから詳しい。⁽¹⁰⁾しかし、須藤はこの写真を「名倉談義」座談会の写真と誤認したままである。

（2）『宮本常一写真・日記集成』の資料的価値

民俗研究者が、現地調査で聞いたことを調査ノートにメモするのは当然のことである。話者の語るまを速記のように記録するタイプ、要点だけをメモして後で整理するタイプ、という二種類の記録法がある。現在であれば IC レコーダの活用がある。宮本の日記と写真は、筆まめという褒め言葉を超えている。宮本の日記はその多くが翻刻され、本研究もその恩恵を受けている。『宮本常一写真・日記集成』上巻掲載の写真（243 ページ）は、宮本が写っていないだけで、被写体の人物は、須藤が用いた写真と同じアングルである（0199・11F）。キャプションには「名倉・大蔵寺で話を聞いたみ

なさん」とある。この写真は多くの研究者に用いられている。宮本の昭和36年（1961）の日記は、以下のように記される（傍線筆者）。

1月20日金…名倉。中学校→大蔵寺→宿

1:20。金。朝ほんとにつめたい。時間がすこしあるので中学校までいって見る。鈴木富美夫君も手伝ってくれることになり、みんなで大蔵寺へいく。金田茂三郎、後藤秀吉、金田金平、後藤種一郎母などあつまって昔のはなしをいろいろきく。夕方になる。それからかえって来て、夜は青年に3人ほどあつまってもらって今の名倉についてはなしてもらふ。今夜もひえる。（宮本2005：282）

これによると、座談会は1月20日の開催で、参加者も明らかである。「宮本日記」に記された「後藤種一郎母」は「後藤さわ」であつた。⁽¹¹⁾多くの著作において、「名倉談義」座談会の参加者とされる写真は、昭和36年（1961）1月20日に行われたNHKの取材時の撮影であることが判明した。それをさらに裏付けるのは、須藤功『宮本常一』の180ページに「座談会をした村人と」というキャプションの写真である（須藤2022：180）。

この写真は、他の著者の写真とは異なり、宮本が前列中央に写る。宮本はネクタイを締めたスーツ姿である。⁽¹²⁾説明書きは「常一は名古屋大学精神医学の人間関係総合研究班の調査参加。愛知県名倉村（現設楽町）で座談会を持った。昭和31年11月8日※」とある（須藤2022：180）。キャプション中にある※印は、宮本常一のアルバム写真で、周防大島文化交流センター保管を示す。同センターに確認すると、宮本撮影の写真ネガには見当たらないという。⁽¹³⁾調査中は普段着のままであるだろう。宮本の調査写真には正装はほとんどないことに気づくべきであった。

VI 思いやりの灯火をめぐる探索

（1）思いやりの灯火に関わる記述

「名倉談義」で最も感動するのは、斎藤卓志も述べているように、思いやりの灯火に関わる箇所であろう。該当部分は以下のような語りとなっている（傍線筆者）。

小笠原 あんたはほんにこの村一番の働き手でありました。あんたの家の田が重一さの家の下にある。あんたが、下の田ではたらいているときに、重一さの親が、今夜は戸をたててはいけんぞ、金平さが仕事をしておるで、というて、表のあかりが見えるようにしておいた。

金田金 へえ、そうじゃったかのう。わしはまた、あの家はいつでも夜おそうまで表にあかりつけてくれているで、鍬先が見えるもんだから夜おそうまで仕事ができありがたかった。（宮本1984：76）

会話の中で「戸をたててはいけん」とあるが、この当時の戸は雨戸である。確かに雨戸は、引くとか締めるとは言わずに「雨戸をたてる」と言った。現在の田植えは5月上旬であるが、昭和三十年代

前半の田植えは6月中旬で、耕運機普及以前の米作りであった。田起こしは、備中鍬を用いた人力作業⁽¹⁴⁾である。

「重一さんの家」のすぐそばの水田で作業をするのは、金田金平である。金平は夜遅くまで水田で作業を行っていた。水田そばの家は灯火を点けておく。そうすれば外が明るくなって金平は作業がしやすい。座談会で、金平が「鍬先が見えるもんだから夜おそうまで仕事できてありがたかった」と述べる。備中鍬の鍬先が「重一さんの家」の灯火で見えたのである。この会話は、村人のお互いの気遣いに関する話題になっていく。小笠原シウの説明によって、金平は親切心に溢れる対応を知る。灯火を必要とした時期は、田植え前の4月であろう。

座談で突然出てくる「重一さんの家」は、読者を当惑させる。杉本仁は、宮本の記述に対して「誤謬」「カラクリ」があると主張する。その理由は「該当する人物（重一）の存在を調べてみると、この人物が存在しない」からであるという（杉本 2009：203）。宮本は、話者たちの語るまを記述する方法を採用し、細かな補足説明をしていない。そのために、記述に疑問や誤解が生じる結果になったとも考えられた。

(2) 思いやりの灯火をめぐる問題点

筆者は、「重一さんの家」とか「重一さんの親」と語られる語りに、果たして誤謬や作意が入り込む余地があるだろうかと素朴な疑問を持った。そこで「重一さんの家」を調べてみることにした。「名倉談義」では、「重一さんの家」について具体的な解説はなく、唐突に出てきて名字も明らかになっていない。座談の内容に即してみると、「重一さんの家」は社協集落の金田金平家、小笠原シウ家、松澤喜一家の三軒からさほど離れていない場所にあるようである。座談会の記述から「重一さんの家」と「金平の水田」の位置関係を確認すると、以下の点が明らかになる。

①宮本は座談の前段で「とくに重一さんの家のまえの田では夜八時九時まで仕事をした。」と解説する（宮本 1984：62）。

②座談の中で、小笠原シウが「あんたの家の田が重一さんの家の下にある。」と発言している（宮本 1984：76）。

金平の水田と重一家はそばにあり、位置としては水田が家の下のほうにあるという説明である。これほど明らかであれば、筆者の「重一さんの家」探しは、早く解決に向かうと思われた。ところが、調査を始めてみると簡単どころか、紆余曲折を体験することになった。ここで筆者の調査を時間軸に沿って説明してみたい。

①探索の第一段階

まず登場人物の家を住宅地図に落とす作業を行った。調査を始めるとまもなく、松澤喜一家の下にある道沿いに「順市」家があったことを知った。その家は戦後まもなく売りに出され、現在までに所有者が三回も変わっているという。重一と順一の記載の差と思われた。しかし、「順市」家があった場所近くには金平所有の水田はなかったことが判明した。そこで「順一家＝重一家」は成り立たない

と判断した。

②探索の第二段階

次に、後藤建一郎家に着目してみた。この家は、昭和36年（1961）のNHK取材時の座談会に参加した後藤さわ（1981～1984）の家である。さわの長男種一郎（しゅいちろう／1917～2006）は農協役員などを務めた人物である。種一郎の長男である建一郎氏によると、「種一郎」は発音しづらいので、地元では「しゅいっさ」あるいは「しゅいち」と呼ばれていた。あわや宮本の聞き書きにおける記入ミスかと思われた。しかし、同家周辺には金平の水田が一枚もなかったという。この家も重一家に該当しないと判断した。

③探索の第三段階

金平家は、座談会后まもなく社協集落を転出し、昭和三十年代には圃場整備が実施されたので古い水田の位置を調べるのは難しかった。社協集落の松澤敏勝氏と後藤建一郎氏の二人の記憶から、後藤建一郎家の東奥に伊藤忠吉家があったことがわかった。忠吉家は、清水が流れ樋が掛かる場所に隣接していた家なので、地元では「トヨントコ」と通称されていた。金平の水田はその清水を利用して、忠吉家の東側に山があるが、二階建ての主屋は山を向いて東向きに建っていたので陽が当たるのは遅かった。坂の下から登っていくと、家の裏側が見える格好になっており、日当たりの悪い家であったという。

筆者は、令和6年（2024）3月28日、松澤敏勝氏と後藤建一郎氏、そして澤田豊美さんの立ち会いのもとに現地を歩いた。金平の旧水田と伊藤家跡地の間には、かつて荷車が通れる狭い道があった。しかし、家の灯りは十分に届く距離である。金平の水田は、道を隔てた少し高い東の位置にあった。「忠吉家の上」という表現があてはまると思う（写真4 伊藤忠吉家跡を指さす後藤建一郎氏、写真5 忠吉家と金平水田の位置）。



写真4 伊藤忠吉家跡を指さす後藤建一郎氏（少し段差のある上の高まりが金平の水田跡）



写真5 忠吉家と金平水田の位置（左のビニールハウス手前が忠吉家跡、道路右高い所が金平水田跡）

（3）「重一さんの家」の行方

伊藤忠吉家は、昭和三十年代前半に風呂場から出火して全焼してしまった。火元であったために、他地区へ移転したという。現地調査では、伊藤忠吉家と金平の水田の位置関係を確認することができた。松澤敏勝氏と後藤建一郎氏の二人の記憶では、伊藤家には「重一」という人物はいなかったことも確認できた。ここまでの探索を整理すると、以下のことが判明している。

- ①重一という人物は社協集落にいなかった。
- ②金平の水田に灯りが届く可能性のある家は伊藤忠吉家だけに限定された。忠吉家には重一という名の人物はもちろんいない。
- ③伊藤忠吉家と金平の水田の位置に言及した小笠原シウの「あんたの家の田が重一さんの家の下」という高低差を示す発言を考慮に入れると、実際の位置関係は異なる。

これらの事実をどう受け止めるかという問題である。重一はいなかったが、それと思われる家が存在したと理解すれば、宮本が「重一さんの家」と記したのは、伊藤忠吉家の間違いであった可能性が高い。しかし、小笠原シウの「あんたの家の田が重一さんの家の下」という高低差を示す発言を考慮すると、重一家に該当する家など存在しなかったことになる。そして、宮本の記述は正確な聞き書きではないと批判されるのである。杉本仁は「作意された民俗―宮本常一『名倉談義』を読む―」の中で「登場人物を女性に転換すれば、特定できる人物がいらないわけではない。私の聞き調査に間違いがないとすれば、宮本は女性を男性に転換したということになる」と論じた（杉本 2009：203）。しかし、人物を転換するだけで処理できるような問題ではなかった。

筆者は、宮本が記述に際してのミスであった可能性を信じたいと思う。それは宮本の身近にいた香月洋一郎の論文「宮本常一との距離・「宮本常一論」への距離」がヒントを与えてくれた。香月は『私の日本地図』のリニューアル版の編集を担当した経験をもとに、以下のような興味深い指摘をし

ている（傍線筆者）。

彼の文章には、書名、年月などの記憶違い——それも時にはびっくりするような——が多いし、資料の引用などにも写し間違いが少なくない。その点彼の著作は——十分に手をかけて念入りに作成された前述の学位論文をのぞくと——実はきわめてアバウトな一面をもっている。諸々の記憶違いは、おそらく宮本が自身の強い記憶力を過信して、執筆の際に調査記録を見ての確認をしなかったのであろうし、資料を写す際も入念な付きあわせなどはしなかったらしい形跡がうかがえる。（香月 2011：61）

宮本の文章の多くは早書きであり、香月が指摘するように十分な推敲や確認を省略した可能性がある。宮本の文章には記述の間違いもあるという前提で読めば、それで済んでしまうことかも知れない。しかし、繰り返しになるが、民俗研究の枠組みで把握する立場からは、民俗資料の聞き書きに関する正確性の追究は必須なのである。

「思いやりの灯火」に関する正確性を担保できたかと言え、否と言わざるを得ない。しかし、杉本の批評のように誤謬や作意であると断言することも難しい一面があると思う。本研究では、宮本に作意はなかったことを祈りつつ「思いやりの灯火」に関わる探索を打ち切り、全体の記述の流れを追いつつ、宮本が目指した生活誌の方法について見ていくことにしたい。

Ⅶ 「名倉談義」にみる生活変化の記述

座談会では、出征兵士の見送りの万歳峠、道路の拡幅と荷車の盛況、交通に伴う町の成り立ち、稲作の技術、養蚕の導入と住宅の変化、稗や菜飯などの食文化の変遷、ヒマヤ（月小屋）と穢れ感の遅速の問題、夜這いの思い出、桶茶の民俗など、実に多くの話題が取り上げられている。いずれも生活変化がキーワードになっている。主な話題は以下のものであった。

（1）道路と商業圏の拡大

金田金平は「この村が大きくかわりはじめたというのは、やっぱり道ができてからではなかっただろうかの。あれはわしの八つの年だったから明治二十五年だろう。わしは明治十八年の一月生れだから」と語る（宮本 1984：62-63）。明治 25 年（1892）、原田甚八郎村長の時代に、改修里道といって村道のままで道幅を拡幅する方法で、道幅二間（約 3.6 メートル）に拡幅していった。

道ができると、駄賃付けが荷車や運送馬車に変わり、昭和初年にバスやトラックが通るようになった。すると従来の荷車は廃れていく。名倉では丑市という男が馬車の元祖と伝えられる。馬を乗りこなせる人は馬車を所有した。多いときは一六台の馬車があった。運送馬車は四輪車である。運送馬車ができから三〇年間は、村に活気があったという。荷車は二輪車である。名倉だけで荷車引きが五〇人もいて、秋の収穫が済むと荷車引きとして稼いだ。運送は荷継ぎの場所が必要になる。名倉近くは田口が荷継ぎ場となり、急速に発展していった。買い物も次第に田口へ行くようになり、さらに交流が深まって田口は活況を呈し町場を形成して現在に至る。

(2) 稗畑から桑畑へ、養蚕業の発展

早川孝太郎は、『村松家作物覚帳』の中で、名倉村の隣村下津具村の村松家では、近世末期から明治中頃までは稗畑が耕地の三割から四割を占めていたことを明らかにした。村松家は、明治25年(1892)に桑の木を植え付け、桑畑に転作を始めている。昭和7年(1932)の耕作図を見ると、今までの稗畑はすべて桑畑に転換された(早川1973:106-109)。

名倉の大久保や猪之沢では、米が穫れないような田があり、そこには稗を植えていた。この傾向は下津具村と同様であったと推測される。日常食に稗が食べられなくなるのは、作付面積が減少していく現実でもあった。明治中期、稗畑には桑が植えられ、養蚕が盛んになっていく。養蚕が始まる前の主屋は茅葺き屋根であった。養蚕業の導入は主屋にも大きな変化があった。金田茂三郎は「飛驒の大工が来て、板屋根をひろめたんであります。それから養蚕が盛んになって、蚕をかうために二階をつけました。蚕はみんなのふところ具合をようしましたのう」と語る(宮本1984:82)。養蚕普及以前は、藍・お茶・煙草・馬が主要生産品であった。名倉馬は中馬の馬として知られ、一軒で数頭飼育する家が多かった。

養蚕に関しては、群馬県富岡へ飼育法を習いに行った人のことが語られている。養蚕教師は群馬県方面から来たようである。蚕室作りの主屋も、明治三十年代後半に建築されていく。繭の共同販売を行うようになり、大正5年(1916)に東名倉養蚕組合が設立された。養蚕の発展によって、人びとの暮らしが急速に良くなっていった。生産者が増えると、繭を一か所に集めきれなくなって集落毎になっていく。座談では、村の暮らしがどのように良くなっていったかが具体的に語られた。

(3) 菜飯の消滅と食文化

四人の話者たちは、日常生活の変化も語る。貧しい家ではいつも菜飯を食べていたが、次第に稗飯から麦飯に変わり、昔ほど菜飯を食べなくなったという。その年代は明治30年(1897)頃である。小笠原シウは「わたしの家はとくべつに貧乏だったで、食いものごしらえには苦勞した」と語る(宮本1984:71)。「ヘズリ飯」を食べたとあるが、ヘズリ飯とは、乾菜をゆでて、ゆで汁を馬にやり、菜を細かく刻んで菜と稗と米を混ぜて炊いたものである。ヘズリ飯には塩を少し入れる。米と稗の比率は家によって異なるが、多くは半々であつたらしい。それが明治二十年代になると稗の作付面積が減ってきたので稗は三分の一位になったという。

稗は郷倉の備蓄にしていたという。江戸時代にあった郷倉は近代に入って一時中断するが、稲武の古橋家が報徳会の仕事として備荒貯蓄のために稗を貯えさせるようになった。どの農家でも二年分の備蓄をした。稗は何年経っても虫が食わず味も変わらないと語る。生活を切り詰めるには「食うものを始末」「食うもの」は食事のことであり、「始末」は後始末ではなく、儉約の意味である。

(4) 桶茶の記憶と茶桶・茶笥

金田金平が「茶桶でありますか」と語る部分がある(宮本1984:74)。これは宮本が質問したことに対する返事であろう。一つ的话题を語り続けてもらうのではなく、合いの手のように、的確に質問を挟んでいる。この言葉をきっかけに、話題は片手桶(清め桶)に移っていく。片手桶は茶を飲むのに使うのではなく、毎朝、桶の中に塩を少し入れて家の中を清めた(写真6 茶桶と茶笥、写真7



写真6 茶桶と茶笥（奥三河郷土館所蔵）



写真7 清め桶（片手桶・津具民俗資料館所蔵）

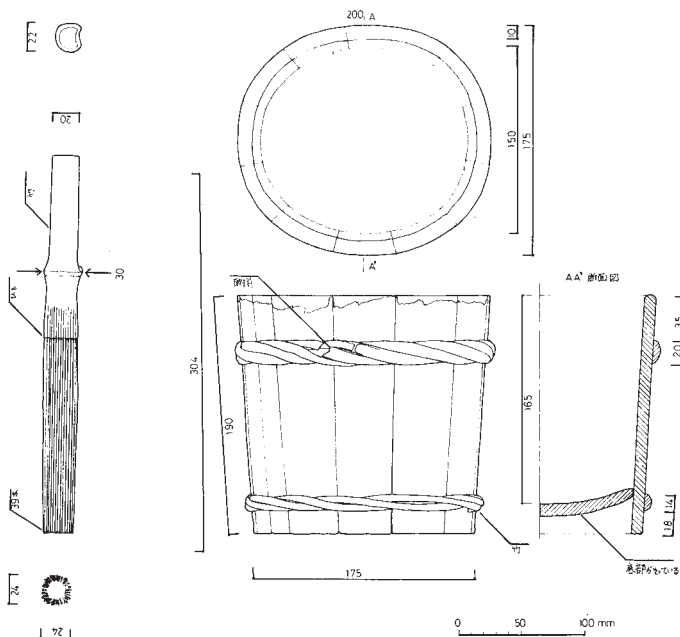


図2 桶茶用具（津具民俗資料館）『山村民俗の物質文化的研究』27ページより転載）

清め桶)。

桶茶は、茶桶の中へ茶葉を入れ、お湯を注いで塩を少々加えて茶笥でかき混ぜる。泡がよく出るのが良いとされた。振茶は現在、名倉では消滅民俗である。津具村で採集された桶茶用の茶笥の図が『山村民俗の物質文化的研究』に収載される（松下1990：20-21, 27）。

原田清が「山村喫茶民俗」という詳細な報告を『設楽』16巻に載せ、東栄町中設楽の菅沼家「坂柿一統記」の記録を紹介した（原田1937：524-530）。この記録の文化15年（1818）の欄に桶茶の記事がみえる。この時点において既に消滅民俗に近かったようである。原田は、北設楽郡東栄町中設楽で明治末年まで飲用していた高齢者を見つけ出して話を聞いている。それによると、昭和12年（1937）時点で、長野県下伊那郡神原村では九十七歳の男性が二〇年前まで桶茶を飲んでおり、泡立てるお茶を飲む習慣で「茶を振る」とも呼んでいた。茶葉を袋に詰めて茶釜でくたくたと煮た後、茶桶に汲んで塩を入れて掻き混ぜた。これは渋みの強い味である。もう一つの方法は、茶を石臼で挽いて篩にかけた抹茶を掻き混ぜる方法で、チャノコと呼んだという。



写真8 松澤家から見たSさんの家がある森（左の自動車の上あたり）

この習俗は、富山県や新潟県糸魚川に残るバタバタ茶の系譜につながる。漆間元三編著『振茶の習俗』によると、茶桶の茶をたてるときは、長さ八寸直径一寸ほどの茶笥を持って、茶桶を膝の上に置いて、やや傾けて桶底があらわれている水際の部分を穂先で手早く動かすと泡立ちやすい。次第に泡が立ち、しまいには細かなこなれた泡になる。このお茶を茶碗に移して飲むが、泡だったお茶なので、飲むたびに口の周りが泡だらけになる。この茶を飲むときは必ず香煎を食べた。お茶に塩を入れるのは泡立ちをよくするためと、茶に塩を入れると飲みやすくなる。疲れがとれ、病人には健康回復に良いと言われていた。乳がよく出るとも言われ、食事のたびに茶を飲んだ（漆間編著 1982：130-131）。

この桶茶は、渴を癒やし、空腹を癒やすとともに整腸作用にも効果があったが、明治末年に静岡茶の普及によって終わりを告げたい（名古屋女子大学生生活科学研究所編 1984：361）。名倉における労働時の食事は、オチャノコ、アサメシ、ヒルメシ、ヨイヂャ、ヨーメシ、と五回食べていた（宮本 1984：76）。朝食・昼食・夕食の三回以外に、間食としてオチャノコとかヨイヂャ、と茶の名が付いている。

（5） 後光がさした家、笠の中に十円札の話

「名倉談義」には、座談会のほかに当日参加できなかった松澤喜一の聞き書きが載る。座談会の補遺的な事柄と、座談会で話題にのぼらなかった事柄が記される。松澤喜一の語りの中で、後光がさした家の話が出てくる。この語りは、あまりにも物語性が強いのだが、ある家の盛衰を語りながらも運の良さをリアルに語っていると思う。後光がさした現象に結びつけた美談であり、現在も語り継がれ⁽¹⁵⁾ている。

松澤家とSさんの家（屋号栃田の勘助）との間には水田が広がる（写真8 松澤家から見たSさんの家がある森）。松澤家より先に、Sさんの家に朝日が当たる。太陽の光は水をたたえる水田に反射してSさんの家に当たる。直接の朝日と反射する光の両方が当たり、後光がさしたように明るく輝

いて見えた。Sさんの家は旧家であったが、家運が悪くて破産寸前であった。喜一は、後光がさしたように明るい光景を見て、Sさんの家はきっとこれから良い方向に向かうだろうと感じた。あるとき、喜一がSさんに後光がさすことを語った。すると、Sさんは松澤家へやってきて、朝日の輝きによって自分の家に後光がさす様子確かめた。Sさんは後光がさしているわが家を見て、「ほんに、あれがわが家でありますか」と、しばらく声も出ないほど感動したという（宮本 1984：94）。Sさんは元気を取り戻して帰っていった。それからまもなく農地解放が実施され、Sさんが小作として耕作していた水田（元はS家所有）が戻ってきた。その後、Sさんは松澤家に新しいハサ（稲架）を立てた報告にやってきた。「おじいさんはありがたい。わしもおじいさんが見ていてくれるじゃろうと思つて、クリの木の上等なのを買つてきてたてた。さしわたしが七寸もある木じゃから、末代ものじゃろうと思います」と大変うれしそうに語った。丈夫なハサを建てる家は財産を興すと言われた（宮本 1984：95）。

また、大阪から旅して松澤家で落ち着いた法印夫婦の話がある。法印夫婦が旅先で笠を忘れたことがあった。二里も歩いてきたのだからどこかで買えばいいと法印は言ったが、女房はわざわざ引き返して笠を取ってきた。実は、笠の縫い目に十円札が入れてあり、もしものときのお金だという。心がけの良い女性の顕彰の語りであるが、どこか昔話を聞いている錯覚に陥る。この法印は、座談会参加者の金田茂三郎の霊性を見抜き、「おまえは易者になる力がある」と見抜いたのである（宮本 1984：91）。

まとめ

柳田國男は『民間伝承論』で、民俗資料の三部分類を提示してみせたが、その多くは人びとの日常生活に関わる非文字資料であった。非文字資料は、何らかの技術的な操作を加えて文字資料化（＝歴史記録資料）が行われていく。人間の営みに関する資料は、そもそも文字化されることは皆無に近かったが、民俗学はそれらを可能にする学問として柳田國男によって創始されたのである。

本研究が対象とした宮本常一『忘れられた日本人』収載の「名倉談義」は、愛知県北設楽郡名倉村における座談会の記録である。宮本という手練れの調査者が、地元の高齢者の中に入っていた。高齢者の皆さんに語り合ってもらいながら、必要に応じて宮本が合いの手を入れて聞き書きする座談会であった。宮本は、高齢者の語りを聞きながらカタカナを用いて速記のようにノートに記録化していった。「名倉談義」は、それらを整理し直して文字化を試みたものである。宮本は、聞き書きした時の記憶を甦らせ再構成をしながら記述化を図ったと考えられる。人間のする仕事であるからミスは生じる。完全ということはある得ない。

座談会は、昭和 31 年（1956）11 月 8 日の夜に開催された。開催時期は、アジア太平洋戦争終結から一〇年経過した高度経済成長期に入る直前であった。明治生まれの高齢者たちは、明治時代から調査時点までの名倉における生活変化を語り合った。郷土史家澤田久夫は、語り手の選定や会場設営について全面的に協力した。さらに当日は、座談会をコーディネートしている。

本研究は、当初には宮本常一が記述に作意を加えたという疑問解決を契機としている。「名倉談義」の内容に関しては、「宮本日記」、地元の言い伝え、そして現地調査などを試みた。総合的分析を行っ

た結果、明らかになった事項として以下の五点が指摘できる。

第一点は、名倉談義の開催日時を確定できたことである。先行研究では開催を昼間からとする佐野眞一の見解があるが、これは「宮本日記」によって夜からの開催が明らかになった。「名倉談義」の座談会は、昭和31年（1956）11月8日の夜であった。座談会参加者の氏名の読み方、参加時の年齢、生没年、簡単なプロフィールは、筆者の聞き書きで明らかにすることができた。今後はこのデータを利用していただきたいと思います。

第二点は、先行研究で「名倉談義」座談会の記念写真とされてきた写真は、NHKが昭和36年（1961）1月20日の「民俗学の旅」番組取材時の撮影であることを明らかにした。澤田久夫宛葉書及び「宮本日記」から撮影時期を確認できた。この撮影年月の誤認に関しては、宮本の責任に帰すべき問題ではなく、宮本研究を試みる人たちが正確性を担保すれば済む問題であった。今後、この写真に関しては「名倉談義」座談会時の写真としては使用できない。ここに至る探索では、「宮本日記」が役立った。『宮本常一写真・日記集成』の資料的価値についても論じたが、日記翻刻担当者の労を多としたい。同書は今後の宮本研究に欠かせない資料になるであろう。

第三点は、人びとに感動をもたらす「思いやりの灯火」の問題である。筆者の調査でも「重一さの家」は最終的に確認できなかった。金平の旧水田の位置などから判断すると、出火で転出した伊藤忠吉家であった可能性が高い。宮本は、調査ノートにはカタカナ書きしていた。原稿を起こす際に誤記した可能性がある。調査データの厳密性を主張する宮本にとっては、手痛い失点と言えよう（宮本1940：5-7）。『忘れられた日本人』は、宮本特有の「ハナシ集」であると割り切ってしまうと、「重一さの家」へのこだわりは些末な問題に成り下がってしまう。しかし、民俗学の書という立場から理解する筆者としては、事実の追究を深めながら紆余曲折の結果導き出した結論であることを特記しておきたい。調査研究における論文・著書の執筆に際しては、現地へフィードバックする方法がある。地元の人たちによる原稿内容の入念なチェックがあれば、基本的なミスは防げたであろう。データの公表に際しては話者への確認了解も必要であろう。⁽¹⁶⁾

第四点は、生活変化に関する生活誌の問題である。名倉の生活が変貌する様子は、宮本に促されて高齢者たちが生活変化を語り始めた。具体的には、道路と商業圏、稗畑から桑畑の変遷、養蚕業の発達、食生活の変遷、桶茶習俗などが語られていった。本研究では、それらの事例に関わる意義を明らかにできたと思う。「後光がさした家」「笠の中に十円札」などのカタリは、宮本らしさがにじみ出たまとめ方であろう。この「名倉談義」の座談会は、聞き手の宮本が埋没している印象であるが、それは宮本の方針でもあったであろう。民俗変化の諸相をパノラマ風に紹介するには、複数人が語り合い、話者の経験知が読者に直接伝わる語りの方が有益である。生活変化のあり方が理解しやすい記述の巧みさがあり、変貌の様子を話者に語らせる採集者の技術が垣間見られる箇所である。「名倉談義」は、調査の現場にいる臨場感を読者に与える記述スタイルをとっており、生活変化の民俗誌の巧みさを学ぶ部分であろう。

第五点は、「名倉談義」の記述をめぐる探索は細かな発見が続き、それが次の追究への原動力となり、改めて現場に立つことの重要性を痛感した。宮本が「重一さの家」と記した人物と、その家に関する探索は混迷する結果となった。しかし、「思いやりの灯火」は、事実であったと考えておきたい。後光がさした家のS家と松澤喜一家（現、敏勝氏）の位置関係は、現地に立ってみると東から

太陽が昇り、水が張られた水田に太陽光が反射してその光がS家のガラスを照らすことが実感できた。現在は樹木が成長しすぎてしまい、S家が直接見えない状態であることを付記しておく。

最後に、「名倉談義」を民俗学の書として読み進めてきた筆者の感想である。「Ⅲ 問題設定と解明すべき課題」で示したように、「重一さの家」の探索は紆余曲折を経て、その人物は実在しないことが判明した。その結果、読者に感動を与える重要な箇所の記載事実の正確性は失われてしまった。ここで学ぶべきは、話者からの聞き書きに際しては、正確に聞き取って記述するという基礎的な重要事項の遵守^{じゆんしゆ}であろう。民俗調査にあたっては、話者の記憶の曖昧性を何度も確認するとともに、記述にあたっては可能な限り正確性を心がける以外に良い方法は見つからない。実験科学分野と異なり、非文字資料としての伝承資料は再確認できないことが多い。そのことを肝に銘じておく必要がある。

今回の「名倉談義」に関わる調査研究は、伝承資料と非文字資料の関わりを学ぶ機会となった。2020年春以降、新型コロナウイルス感染症(covid-19)が日本全体を覆い、現地調査を基本とする民俗学も多大な影響を受けた。本研究の初期においては、コロナ禍にあって調査自体ができない状況が続いた。ようやく現地へ足を運べるようになり、現地を歩いて人びとと会話をする中で、新たな発見もあり、フィールドの新鮮さがひととき印象深いものであった。宮本の調査ノートの点検は残るが、それは今後の課題としてひとまず探索を終えることにする。

【付記】

covid-19が猛威を振るう中、澤田豊美さん（澤田久夫の息子淳夫氏の妻）のご協力により、座談会参加者のプロフィールや記述内容の検討を進めることができた。宮本の調査ノートが保管される周防大島文化交流センターの板垣優河学芸員にはコロナ禍であったが、電話とメールで各種のご教示を得ることができた。写真3の掲載許可にあたってはご配慮を賜った。本研究は、地域社会の内面にかかわる内容も含むので個人情報の保護には可能なかぎり配慮したが、分析のために氏名情報をそのまま用いている。

コロナ禍が沈静したと思われる2024年3月、名倉の現地調査を実施することができた。現地では、松澤敏勝氏（昭和13年生まれ、松澤喜一の孫）と後藤建一郎氏（昭和16年生まれ、後藤さわの孫）、澤田豊美さんのご案内で集落内を踏査することができた。また、大蔵寺の中村郁二住職（昭和12年生まれ）には過去帳の調査などでお世話になった。奥三河郷土館の渡辺俊也先生（学芸員・元館長）には茶桶の写真撮影などでお世話になり、地域の民俗事例に関しては、荒尾の林良子さんと津具の村松清和先生に色々のご教示を頂いた。論文掲載に際しては、匿名の査読者二名から丁寧な意見や示唆を頂戴した。特に非文字資料について考える機会を得て、論点を鮮明にすることができた。以上、記してお礼を申し上げる。

注

- (1) 『忘れられた日本人』（岩波文庫）は、昭和59年（1984）5月16日が第一刷の発行である。筆者の手元にある岩波文庫は、令和3年（2021）3月15日第72刷である。注は田村善次郎、解説は網野善彦が担当している。同書の底本は『忘れられた日本人』（未来社、1960年2月）である。平成22年（2010）にジェフリー・S・アイリッシュの英訳本『*The Forgotten Japanese*』が刊行された。同書は人名の読みに問題が残

る。

(2) 宮本は、『民俗学の旅』の中で「実は私は昭和三十年頃から民俗学という学問に一つの疑問を持ちはじめていた。ということは日常生活の中からいわゆる民俗的な事象をひき出してそれを整理してならべること
で民俗誌というのは事足りるのだろうか。(中略)人びとの日々いとなまれている生活をもっとつぶさに見るべきではなからうか。民俗誌ではなく、生活誌の方がもっと大事にとりあげられるべきであり、また生活を向上させる^て梃子になった技術についてはもっとキメこまかにこれを構造的にとらえて見るのが大切ではないかと考えるようになった。」と記している(宮本 1978: 194-195)。

(3) 本研究で用いる「非文字資料」の概念に関しては、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの国際シンポジウム報告を参照した。21 世紀 COE プログラムは、図像・身体技法・景観の三つを取り上げ、文字資料と非文字資料の関係性を極めながら非文字資料研究を深めることを最終的な目標とした広大な構想である。第 1 回国際シンポジウムと第 2 回国際シンポジウムの報告書には、非文字資料に関する各分野の研究報告が載るが、川田順造「非文字資料から見る人類文化」、能登正人・木下宏揚「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」、的場昭弘「非文字資料はいかに認識されるか—近くをめぐる哲学的諸問題—」の各論文は、本研究に有益な知見を与えてくれた。「非文字資料」の用語は、厳密な概念規定が行われていない面もあり、今後は統一された枠組みと論点の整理が必要であろう。将来的には、柳田國男が創始した日本民俗学と澁澤敬三のアチック・ミュージアムにおける研究成果の融合・連携が人文学の発展のために大きな課題になってくると思われる。

『非文字資料研究』は 2024 年 5 月時点、第 27 号を発行している。第 1 号から第 4 号までは、『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』という誌名である。第 5 号から第 12 号までは『年報非文字資料研究』という誌名である。そして、第 13 号からは、『非文字資料研究』と誌名変更をし、年二回発行となって現在に至る。既刊の 27 冊を^{べっけん}瞥見してみたが、「非文字資料」に関する理論的考察を扱った論文は極めて少ない。それは、シンポジウムで多角的に論じられてきたために「非文字資料」の用語・内容に関しては、所与のものと認識されてきたのであろうか。

「非文字資料」に関する論文として、網野暁「非文字の資料と資料化」、川田順造「感性の諸領域、とくに匂いの文化についての、フランス南部と西アフリカ三カ国での初次的調査」、佐野賢治「非文字資料と地域社会」、福田アジオ「生活図像資料と文献データベースの作成」「図像資料としての素人絵—生活絵引き編さん資料としての可能性—」「図像資料と民俗学」などを見いだしたが、これら論文では、正面から非文字資料の定義についてはほとんど言及していない。

(4) 加藤秀雄によると、日本民俗学界では高木敏雄が雑誌『郷土研究』創刊号で用いた「伝承」が初出であり、既に田中宣一も指摘しているという(加藤 2023: 38)。それは、大正 2 年(1913)と早い時期の使用例である。筆者は、加藤論文を理解した上で、柳田が当該用語を解説しながら用いたのが昭和 3 年(1928)であったことに着目している。

(5) 網野善彦の『〈忘れられた日本人〉を読む』(岩波書店、2003 年)は、タイトルから作品の評価が記されていると期待したが、内容は宮本常一との出会い、網野学説に引き寄せた記述に終始する。「名倉談義」に関しては、養蚕が活発であったこと、地主の没落と夜這いの話がわずか取り上げられるだけであるため、本研究では網野の同書を批評の対象から除外している。なお、岩田重則は網野の同書に対して厳しい批評をしている(岩田 2014: 7-8)。

(6) 宮本の「土佐源氏」「対馬にて」「名倉談義」に対し、資料的捏造と改竄という批判が出ている(柳田國男研究会編 2000; 杉本 2009)。これに関連して、岩本通弥が従来のように、宮本に対して手放しの絶賛は破綻したと同調している(岩本 2012: 47-48)。宮本の著作に親しんできた筆者は、それらの批判をそのまま受け入れるのではなく、当該部分を自分の目で確かめたいと考えた。

(7) 賀曾利隆は、エッセイ「〈名倉談義〉探訪記」の中で、「小笠原シウさんは戸籍上では「小笠原しやう」さんで、「しょうさん」とか「じょーさん」などと呼ばれていたという。明治一六年生まれで、「名倉談義」の座談会で話した翌年の昭和三二年に亡くなられた」と取材成果を記している(賀曾利 2005: 101)。松澤

- 敏勝氏は子どもの頃に「オジョウバア」と呼んでいたという。
- (8) 川村久二雄は、結婚して竹中姓となる。後に東京農業大学教授を務める。昭和31年(1956)に宮本の名倉調査を手伝い、『林業金融基礎調査報告 25 造林篇 3号 愛知県北設楽郡設楽町名倉』を宮本と共同執筆している。
- (9) 木村哲也『〈忘れられた日本人〉の舞台を旅する—宮本常一の軌跡—』の199ページの写真に「1951年1月20日宮本常一撮影」とキャプションがあるが、「1956年」の誤りである。
- (10) 須藤功は、澤田家へ当該写真を送付して写真の人物を問い合わせた。澤田豊美さんが写真アルバムを確認して回答したという(2022年5月31日、澤田豊美さんへの電話取材)。須藤の解説は、こうして正確性が担保されたのである。
- (11) 「後藤さわ」は、後藤建一郎氏(昭和16年生まれ)の祖母であり、種一郎の母である。建一郎氏は、祖母さわがお寺に出かけ、先生たちへ話をしたことを覚えているという(2022年5月31日、後藤建一郎氏への電話取材)。
- (12) 後藤建一郎氏が保管する写真は、須藤功『写真でつづる宮本常一』掲載の写真と同じである(須藤編2004:94)。参加者全員に送られたものであろう。
- (13) この写真は『宮本常一写真・日記集成』の243ページ掲載のものであるという。周防大島文化交流センター宮本常一記念館の板垣優河学芸員によると、「名倉聞書2」(資料番号2-1・0079・01・00)に「金平サンガカヘルマデハ戸ヲタテルナト……」という記述が確認できるという(2022年6月4日、メールによる私信)。この宮本のノートは、現在山口県指定文化財になっている。この閲覧によって新しい展開があるかもしれないが、今後の課題である。
- (14) 設楽町荒尾の林良子さんのご教示によると、3月には田の畦^{あぜ}を作る。畦に生えた草は平鍬で掻くが、この作業を「畦の皮むき」と呼ぶ。シホンビチュウ(四本備中鍬)で土をすくって畦にのせ、鋤できれいに塗りあげるが、これを「畦塗り」と呼ぶ。備中鍬(このときは三本備中を用いる)で田を起こす時期は、3月下旬から4月上旬である。3月末はまだ寒く、土が硬いので力仕事であった。田起こしが済むと代掻き、そして田植えと続く。
- (15) 『JA 愛知東』339号(2022年2月号)では「後光が差す家」、同誌313号(2022年6月号)では「忘れられた笠」と題し、民話風に編集されている。
- (16) 野口武徳は、『沖縄池間島民俗誌』の「まえがき」で、自身の失敗体験を語りながら、「現地調査の記録を、印刷の前に現地の人に一度読んでもらうという慣習を、日本の民俗学会や民族学会の方々にうったえたい」と記している(野口1972:4)。また、中野紀和は論文「ライフ・ヒストリーと民俗学」の中で、聞き書きにおけるデータ公表に関する必要不可欠な作業として話者への了解を挙げている(中野2020:315)。中野は、宮本常一の『忘れられた日本人』の評価をめぐる、語られた内容と事実とのズレについても論じている(中野2007:28-29)。

《参考文献》

- 網野 暁 2004 「非文字資料研究についての一考察」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』1号 神奈川大学 21世紀 COE プログラム研究推進会議
- 網野 暁 2004 「非文字の資料と資料化」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』2号 神奈川大学 21世紀 COE プログラム研究推進会議
- 井出幸男 2000 「『土佐源氏』の成立」柳田国男研究会編『柳田国男・民俗の記述』 岩田書院
- 岩田重則 2014 『日本人のわすれもの—宮本常一『忘れられた日本人』を読み直す—』 現代書館
- 岩本通弥 2012 「民俗学と実践性をめぐる諸問題—「野の学問」とアカデミズム—」岩本通弥ほか編著『民俗学の可能性を拓く』 青弓社
- 印南敏秀 2013 「宮本常一と愛知」『愛知県史研究』17号 愛知県
- 漆間元三編著 1982 『振茶の習俗』(民俗資料選集12) 国土地理協会

- 賀曾利隆 2005 「〈名倉談義〉探訪記」佐野真一編『宮本常一―旅する民俗学者―』河出書房新社
- 香月洋一郎 2011 「宮本常一との距離・「宮本常一論」への距離」『現代思想』39巻15号（総特集・宮本常一）青土社
- 加藤秀雄 2023 『伝承と現代―民俗学の視点と可能性―』勉誠出版
- 川田順造 2004 「感性の諸領域、とくに匂いの文化についての、フランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』1号 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 川田順造 2006 「非文字資料から見る人類文化」『非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―（神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告2 第1回国際シンポジウム）』神奈川大学21世紀COEプログラム
- 橘川俊忠 2008 「『非文字資料の体系化』についての理論的諸問題」『非文字資料研究の理論的諸問題（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 木村哲也 2006 『〈忘れられた日本人〉の舞台を旅する―宮本常一の軌跡―』河出書房新社
- 河野通明 2008 「神奈川大学21世紀COEプログラムにおける『非文字資料の体系化』とは何か」『非文字資料研究の理論的諸問題（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 斎藤卓志 2008 『世間師・宮本常一の仕事』春風社
- 佐野賢治 2004 「非文字資料と地域社会」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』1号 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 佐野真一 2001 『宮本常一が見た日本』日本放送出版協会
- 澤田久夫 1951 『三州名倉―史の変遷篇―』愛知県北設楽郡名倉村
- ジェフリー・S・アイリッシュ 2010 『*The Forgotten Japanese*』Stone Bridge Press
- 篠原 徹 2011 「記憶する世界と歩く世界―宮本常一の旅と思想―」『現代思想』39巻15号（総特集・宮本常一）青土社
- 杉本 仁 2000 「寄合民主主義に疑義あり―宮本常一「対馬にて」をめぐって―」柳田国男研究会編『柳田国男・民俗の記述』岩田書院
- 杉本 仁 2009 「作意された民俗―宮本常一「名倉談義」を読む―」柳田国男研究会編『柳田国男・主題としての「日本」』泉社
- 須藤功編 2004 『写真でつづる宮本常一』未来社
- 須藤 功 2022 『宮本常一』ミネルヴァ書房
- 全国森林組合連合会・林業金融調査会編 1956 『林業金融基礎調査報告25 造林篇3号 愛知県北設楽郡設楽町名倉』全国森林組合連合会・林業金融調査会
- 中野紀和 2007 『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』古今書院
- 中野紀和 2020 「ライフ・ヒストリーと民俗学」岩本通弥編『方法としての〈語り〉―民俗学をこえて―』ミネルヴァ書房
- 名古屋女子大学生活科学研究科編 1984 『愛知県北設楽地方の生活文化』名古屋女子大学生活科学研究科
- 野口武徳 1972 『沖縄池間島民俗誌』未来社
- 能登正人・木下宏揚 2006 「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」『非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録（神奈川大学21世紀COEプログラムシンポジウム報告2 人類文化のための非文字資料の体系化 第1回国際シンポジウム）』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 早川孝太郎 1973 『早川孝太郎全集』7巻 未来社
- 林 良子 2019 『藍の如く―奥三河の小さな女性史として―』奥三河同人社
- 原田 清 1937 「山村喫茶民俗」『設楽』16巻 設楽民俗研究会

- 福田アジオ 2004 「生活図像資料と文献データベースの作成」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』1号 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議
- 福田アジオ 2004 「図像資料としての素人絵—生活絵引き編さん資料としての可能性—」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』2号 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議
- 福田アジオ 2008 「図像資料と民俗学」『年報非文字資料研究』5号 神奈川大学非文字資料研究センター
- 松下 智 1990 「三・信・遠の製茶・喫茶用具について」木下忠編『山村民俗の物質文化的研究』木下忠
- 的場昭弘 2007 「非文字資料はいかに認識されるか—知覚をめぐる哲学的諸問題—」『図像・民具・景観非文字資料から人類文化を読み解く（神奈川大学 21 世紀 COE プログラムシンポジウム報告 4 人類文化研究のための非文字資料の体系化 第 2 回国際シンポジウム）』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議
- 的場昭弘 2008 「人類文化研究のための非文字資料の理論的課題について」『非文字資料研究の理論的諸問題（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議
- 宮本常一 1940 「資料の確実性といふこと」『民間伝承』6 巻 2 号 民間伝承の会
- 宮本常一 1978 『民俗学の旅』文藝春秋
- 宮本常一 1984 『忘れられた日本人』岩波書店（文庫）
- 宮本常一 2005 『宮本常一写真・日記集成』上巻 毎日新聞社
- 宮本常一 2008 「調査地被害」宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本—』みずのわ出版
- 宮本常一・中田実 1962 「名倉村 3 部落について」村松常雄編『日本人—文化とパーソナリティの実証的研究—』黎明書房
- 村松常雄編 1962 『日本人—文化とパーソナリティの実証的研究—』黎明書房
- 柳田國男 1998a 「木石思語」『柳田國男全集』13 巻 筑摩書房
- 柳田國男 1998b 「民間伝承論」『柳田國男全集』8 巻 筑摩書房
- 柳田國男研究会編 2000 『柳田國男・民俗の記述』岩田書院